



BS1スペシャル

在宅死 “死に際の医療”200日の記録

BS1 6月10日(日) 後10:00~11:49

<後10:50~11:00はBSニュース>

在宅で死にたいのか、在宅でしか死ねないのか……。多死社会の到来と医療費抑制などのために、今後ますます増加する見込みの「在宅死」。しかし、老老介護で介護者は疲弊してお金もないなど、貧困や家族関係の問題を抱えて、在宅で人生の最期を安らかに過ごしたいという希望がかなえられないという厳しい現実と直面するケースもある。都会の片隅で、在宅死と向き合う老医師がいる。埼玉県新座市の病院に務める小堀鷗一郎医師(80歳)。森鷗外の孫で元東大病院外科医がたどり着いた最後の現場が、在宅の「老老医療」だった。その家ごとに異なる厳しい環境の中で、家で安らかに死にたいという患者の願いをどう叶えるのか、200日間にわたって密着し、小堀医師ら在宅医療チームの日々をカメラが追った。

○ 高齢者とその家族に向き合う小堀鷗一郎医師(80歳)

小堀医師は、患者だけでなく家族も見ている。訪問診療をしながら、患者の家族の食事状況や日常行動なども確認し、在宅医療の環境を整えていく。年間1000件の手術を手がけていた大学病院の外科医時代には「患者さんや家族に対して、個々の人と関わるつきあいができていなかった」として、今、患者や家族と「人として」つきあい、いかに「いい死」を向えられるかを模索している。

■ 全盲の娘が看取る、肺がん末期の父

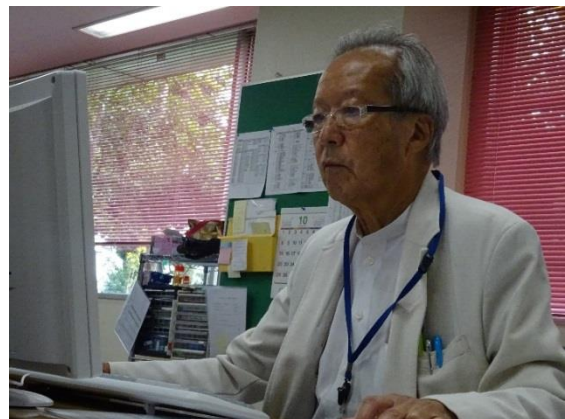
肺がん末期で寝たきりの長谷川千加三さん(83)は全盲の娘と二人暮らし。夫婦で娘の世話をしてきたが、昨年妻が亡くなり、自らの肺がんも進行。娘が一人で看取りを担うことになった。

■ 施設に入るお金がないから、在宅で

金子賢子さん(85)は難病と認知症を患い、寝たきりの生活。もう2年風呂にも入らず、家の2階から出ない。経済的な理由から介護サービスは一切使わず、夫の菊雄さん(82)がただ一人で介護をしてきた。「施設などに入ればお金がかかる。この家で妻を看取るしかない」と話す。

■ 叶わない「在宅死」

星野君子さん(103)は、在宅での最期を願うが、認知症が進行し、家族は夜通しの介護で疲れ果てていた。「私が居なければ、楽だということは分っているの」と、君子さんは自ら施設に向かう車に乗る。



小堀鷗一郎医師